

## 第2節 社会的環境

### (1) 津久見市の沿革

明治時代に入って、本市は旧佐伯藩にあたる地域は佐伯県、旧臼杵藩にあたる地域は臼杵県に分けられたが、明治4年（1871）11月の廃藩置県により、大分県が設置され、翌5年（1872）4月に施行された大区小区制により津久見の村と浦は大分県第四大区に編成され、初めて一つの行政区となった。

第四大区は海部郡で32の小区がおかれた。当時、本市にあった33の村と浦は、第15・16・17小区に編成された。

さらに大分県は、明治8年（1875）に町村合併を行い、県下にあった17町1,801村を8町792村にし、本市にあった33の村と浦を13の村に整理した。

明治11年（1878）、大区小区制の廃止により、本市にあった13の村は北海部郡に編入され、明治22年（1889）の町村制の施行により、下浦・青江・津組・日代・四保戸村の五か村となった。同25年（1892）に、四保戸村は四浦と保戸島に分かれ、本市は六か村となった。

その後、町制の施行や町村合併を経て、津久見町・日代村・四浦村・保戸島村の四つの町村になり、昭和26年（1951）4月に一町三村が合併して津久見市が誕生し、現在に至っている。

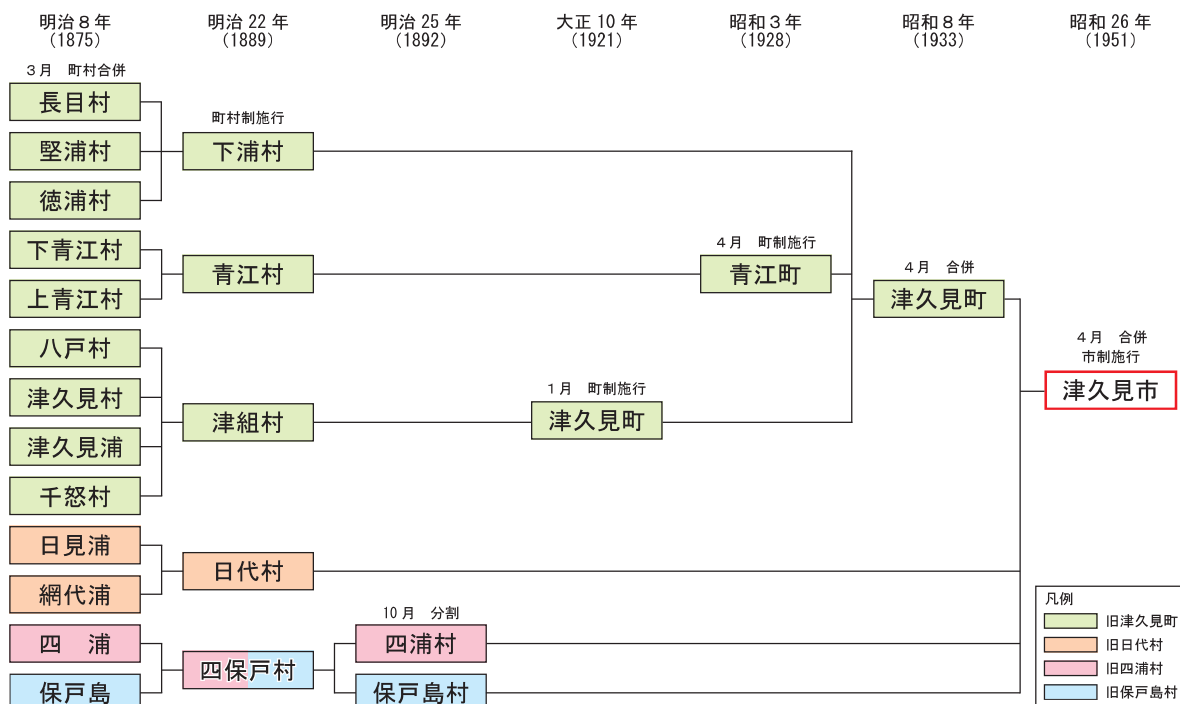


図12 津久見市の沿革

(2) 人口

本市の人口は、令和7年(2025)8月末時点、14,699人(「住民基本台帳」)である。令和2年(2020)に実施された国勢調査から、平成2年(1990)に26,797人であった本市の人口は、30年間で10,697人減少し、令和2年(2020)に16,100人となった。

国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、今後も減少傾向は続き、令和22年(2040)に9,342人、令和32年(2050)に6,800人となり、平成22年(2010)の19,917人からは65.9%も減少すると試算され、一貫して人口減少のまま推移していくと考えられる。

また、年齢3区分(年少人口・生産年齢人口・老年人口)の推計は、少子高齢化が著しく進み、生産年齢人口が大幅に減少する見通しである。

これらのことから、本市の労働力は低下し、生産性や地域経済の縮小が予想されるほか、地域社会における様々な活動にも影響が出ることが懸念される。

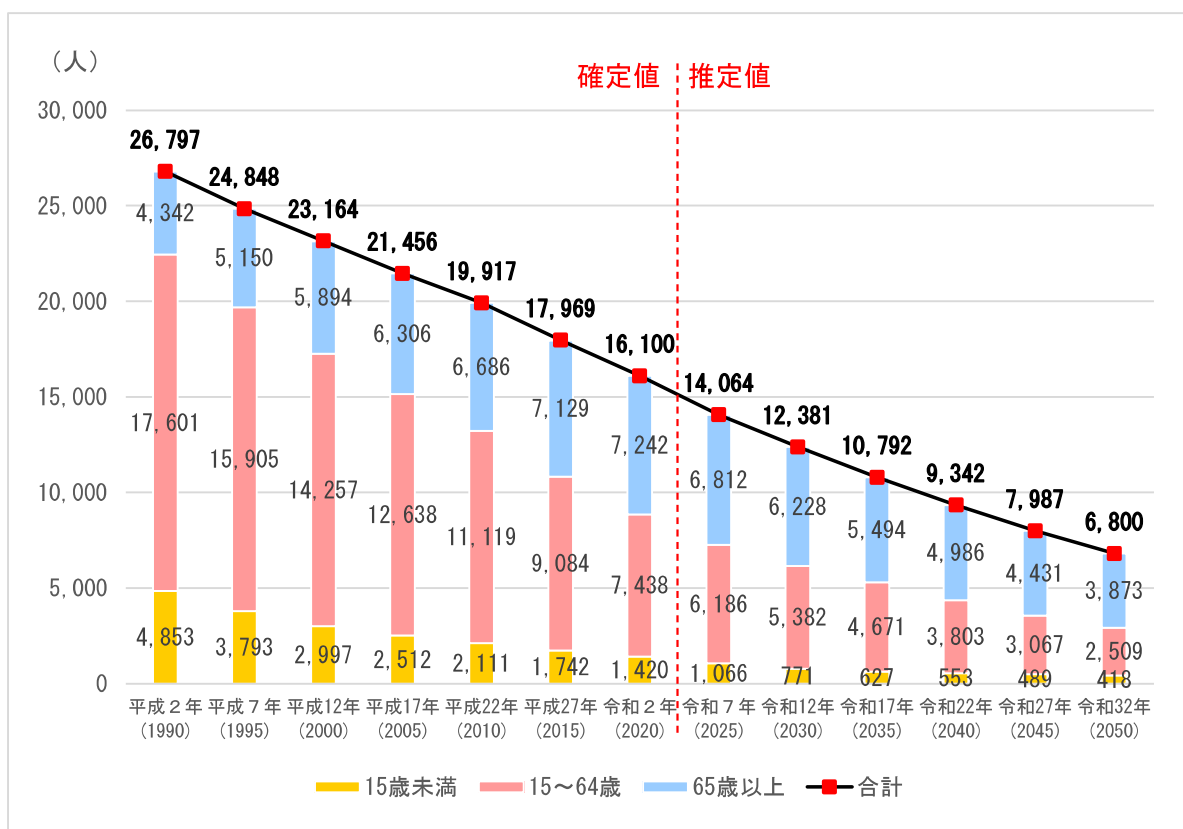


図13 津久見市の年齢別の人口推移

出典：国勢調査1990～2020、日本の地域別将来推計人口(令和2年(2020)推計)

### (3) 産業

本市の産業は、農業、漁業、石灰・セメント鉱業によって代表される。歴史的に見ると、水産業・鉱業の比重が大きく、本市の産業構造を特徴付けてきたが、みかん栽培と石灰石採掘の歴史は江戸時代までさかのぼり、品質の良さで知られてきた。また、マグロ漁業は明治時代後期に、セメント鉱業は大正初期に始まり、本市の基幹産業として発展した。

本市の産業経済は、大正5年（1916）の鉄道（日豊線）開通を機に大きく転換する。それまではリアス海岸の天然の良港を利用した海上輸送が主であったが、鉄道が開通したことにより、セメント工場の進出が続き、石灰・セメント鉱業が本格化した。このことにより、農漁村であった本市は工業都市へと変容を遂げ、県下でも屈指の鉱工業都市となり、現在に至る。

本市の令和2年（2020）国勢調査時点の就業者数は、平成12年（2000）の10,151人から3,010人減少し、7,141人となった。産業別の人口割合を見ると、第一次産業が7.5%、第二次産業が28.6%、第三次産業が63.7%と、第一次産業の割合がほかの産業と比べて減少傾向にある。しかし、市内人口及び労働人口の減少に伴い、第一次産業のみならず、ほかの産業も高齢化や担い手不足といった課題を抱える状況である。

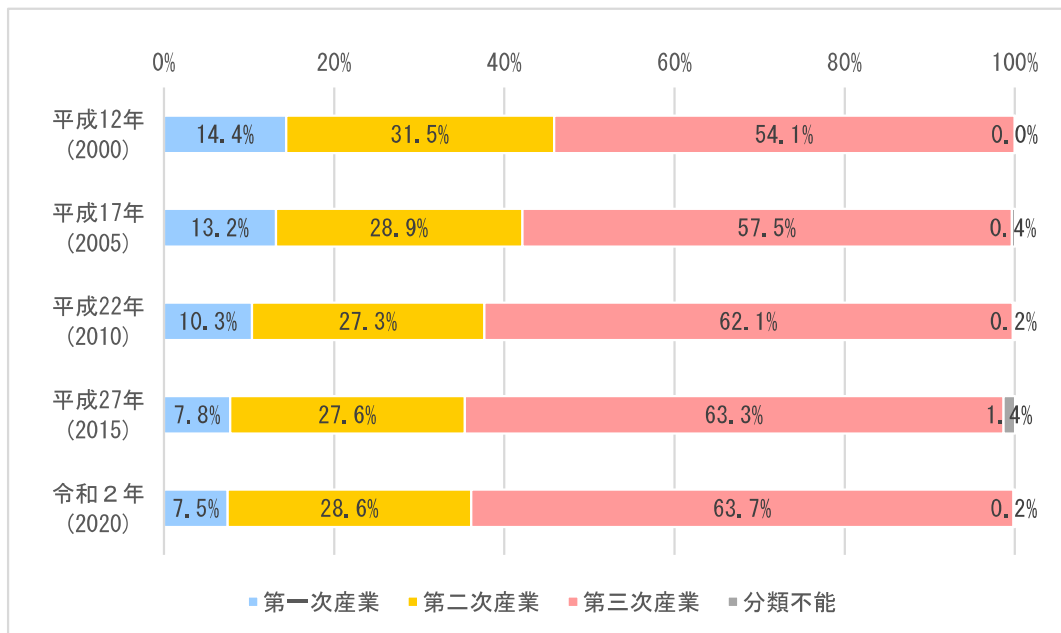


図14 津久見市の就業者割合の推移

出典：『令和4年版 津久見市統計書』をもとに作成

#### ①農業

本市の農業は、従来からみかん等の柑橘類の生産が中心であった。しかし、近年は就農者が高齢化するとともに、農家人口、耕地面積ともに減少傾向にある。

農業従事者を年代別にみると、60歳代以上が全体の8割弱を占め、その平均年齢は66.9歳と高齢化が進行している。一方で20～40歳代の就業者はわずか5%程度であり、担い手不足と高齢化、耕作放棄地の増加が大きな課題である。

また、代表的作物である柑橘類の生産量も平成12年（2000）に2,844tであったが、令和4年（2022）に503.7tとなっており、大幅に減少している。

表2 津久見市の柑橘類生産量、生産額、キロ当たり生産者価格 単位：t、円

年次 区分	平成30年 (2018)	令和元年 (2019)	令和2年 (2020)	令和3年 (2021)	令和4年 (2022)
ハウスみかん	12.3	17.2	18.2	11.4	10.8
早生温州	45.3	40.1	34.3	31.7	27.4
普通温州	69.8	54.4	54.3	55.5	53.4
甘夏	12.6	23.5	16.7	9.9	8.1
サンクイーン	245.9	266.1	236.1	221.1	211.8
その他	190.7	218.5	188.9	194.0	191.9
計	576.6	619.8	548.5	523.6	503.7
生産額	154,057,585	165,510,923	157,671,973	124,722,225	138,775,741
和当たり生産者 価格	267.1	267.0	287.3	238.2	275.5

出典：『令和4年版 津久見市統計書』

②林業

本市の林業については、下表に示すとおり林野面積は令和4年(2022)時点で4,939haとなっており、これらはすべて民有林が占めている。

表3 津久見市の林業 単位：ha

年次 区分	平成22年 (2010)	平成29年 (2017)	令和4年 (2022)
総数	4,949	4,951	4,939
国有林	0	0	0
民有林	4,949	4,951	4,939

出典：『大分県統計年鑑』（平成23年版・平成29年版・令和4年版）

③水産業

漁業は、津久見湾や豊後水道を主要漁場としたまき網・刺し網・一本釣り・小型底引き網等の沿岸漁業と保戸島を基地とする近海・遠洋マグロ漁業及びブリやヒラメの養殖漁業に大別され、魚種は豊富である。遠洋マグロ漁業は、保戸島で明治39年(1906)に始まった。近年は本マグロの養殖も行われている。また、限りある水産資源を守り育てる資源管理型漁業が積極的に進められている。

漁業経営体数は、大分県の経営体数の1割強で推移を続けているが、徐々に減少している。

④ 鉱工業

石灰石を利用した鉱工業は本市の経済を牽引してきた。産出される石灰石は、全国でも特に良質と言われて鉱業が盛んとなり、石灰・セメントの生産を中心とした窯業が鉱工業の主軸をなしている。

石灰・セメントの窯業土石製品の出荷額は、令和2年（2020）を境に減少している。これは東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会需要のピークアウトや人手不足から生産量が減少したことによるものと考えられる。

鉱工業は、本市の経済を牽引してきた産業であり、今後も雇用を図るための支援を実施しながら、地元関連中小企業の経営強化や企業誘致の推進等の新たな展開が求められる。

表4 津久見市の窯業土石製品の出荷額等

単位：万円

区分	年次	平成26年 (2014)	平成29年 (2017)	平成30年 (2018)	令和元年 (2019)	令和2年 (2020)	令和3年 (2021)
窯業土石製品		5,872,403	4,511,969	4,898,737	5,360,683	5,014,931	4,970,812

出典：『令和4年版 津久見市統計書』

※令和3年は、「令和3年経済センサス-活動調査 製造業（地域別統計表データ）」（令和5年（2023）12月15日訂正）による

⑤ 観光

本市には歴史文化に加え、食や景観等の観光資源が数多くある。特に、「保戸島観光」、「河津桜観光」等の地域の景観や自然環境を活かした観光の推進、「津久見モイカフェスタ」、「津久見ひゅうが井キャンペーン」等の食を活かした観光や花火大会、扇子踊り大会等のイベントの取組に力を入れている。

本市の観光入込客数は、津久見 IC 開業、亀の井ホテル（現ホテル AZ 大分津久見店）開業、つくみん公園開園、つくみイルカ島開業等を契機として増加し、平成30年度（2018）に40万人に達した。特に、イルカ島は、県内からの来訪者のほかに、福岡県や宮崎県等、東九州自動車道を利用した県外からの来訪者が多くなっている。

しかし、令和2年（2020）の新型コロナウイルス感染症の拡大により観光・飲食産業を中心に来訪者が急減した。新型コロナウイルス禍からの経済の復興として、新型コロナウイルスの感染対策の普及啓発と支援、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けた事業者等への事業継続支援、アフターコロナにおける観光需要回復促進等、観光を通じた地域の活性化を実現するために、関係者連携のもと事業展開を進めた。



つくみ港まつり（花火大会）



図 15 津久見市の観光入込

出典：『第2期津久見市観光戦略』p.51より抜粋

(4) 土地利用

本市の土地利用の構成を見ると、その他の土地利用（採石場等）が多いほか、その他の土地利用以外は変化が少ないという特徴が見られる。

リアス海岸となっている半島と島のほとんどの海岸線は、日豊海岸国立公園及び豊後水道県立自然公園に指定されており、図17に示すとおり本市の多くの面積を占める。

また、地目別土地利用の構成を見ると令和5年（2023）でその他の土地利用が53.30km<sup>2</sup>と最も多く、ほかの地目と比べ令和2年（2020）から緩やかに減少している。

なお、表5に、地目として田・畑を挙げているが、市域に水田はない。

表5 津久見市の土地利用状況の推移

単位：km<sup>2</sup>

年次 \ 地目	田・畑	宅地	池沼	山林	原野	雑種地	その他	合計
令和元年（2019）	8.37	2.92	0.01	6.06	6.61	2.03	53.48	79.48
令和2年（2020）	8.37	2.90	0.01	6.08	6.62	2.03	53.49	79.50
令和3年（2021）	8.37	2.88	0.01	6.07	6.62	2.05	53.48	79.48
令和4年（2022）	8.37	2.89	0.01	6.13	6.64	2.09	53.35	79.48
令和5年（2023）	8.35	2.89	0.01	6.21	6.65	2.07	53.30	79.48

出典：『令和4年版 津久見市統計書』

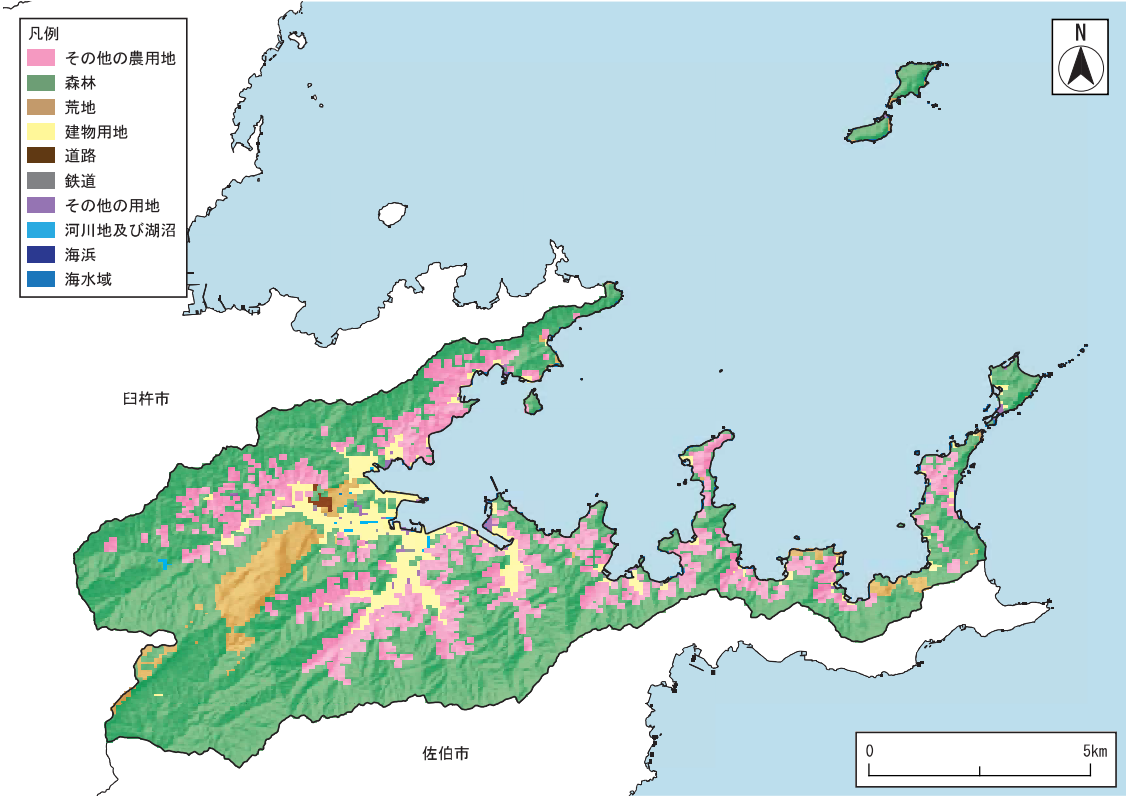


図 16 津久見市の土地利用状況図

出典：国土数値情報、基盤地図情報のデータを加工して作成

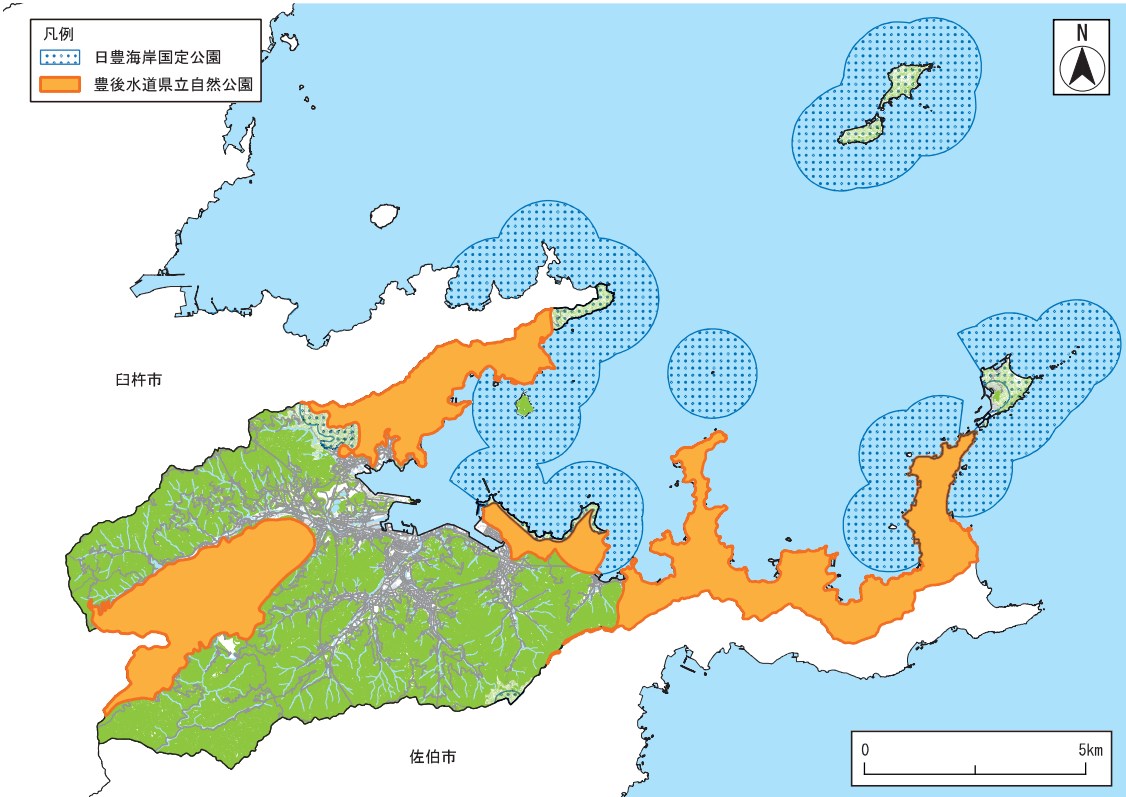


図 17 津久見市の自然公園範囲

出典：国土数値情報、基盤地図情報のデータを加工して作成

### (5) 交通

道路は、市内を通過する国道 217 号が軸となり、そこから半島や谷地に向かって県道が伸びる構造である。平成 13 年（2001）に東九州自動車道の津久見 IC が開通、また平成 27 年（2015）に九州自動車道の佐伯市以南が全線開通し、九州各県の主要都市までの所要時間が大幅に短縮された。

鉄道は JR 日豊線が通り、津久見駅と日代駅がある。また路線バスは、臼津交通株式会社が運行する楠屋・堅浦線、四浦線、川内線、臼津線、中西循環線の 5 路線がある。本市が運行する乗合タクシー「つくみん号」は、中央病院～津久見駅線が平日運行、<sup>おち</sup>落ノ浦～<sup>うら</sup>大浜線が月曜日みの運行、畑～津久見駅線が金曜日みの運行を行っている。いずれも令和 7 年（2025）3 月現在の運行状況である。

その他、本市が運行する離島航路があり、津久見港と保戸島港を結ぶ保戸島航路と、津久見港と無垢島港を結ぶ無垢島航路の 2 航路がある。

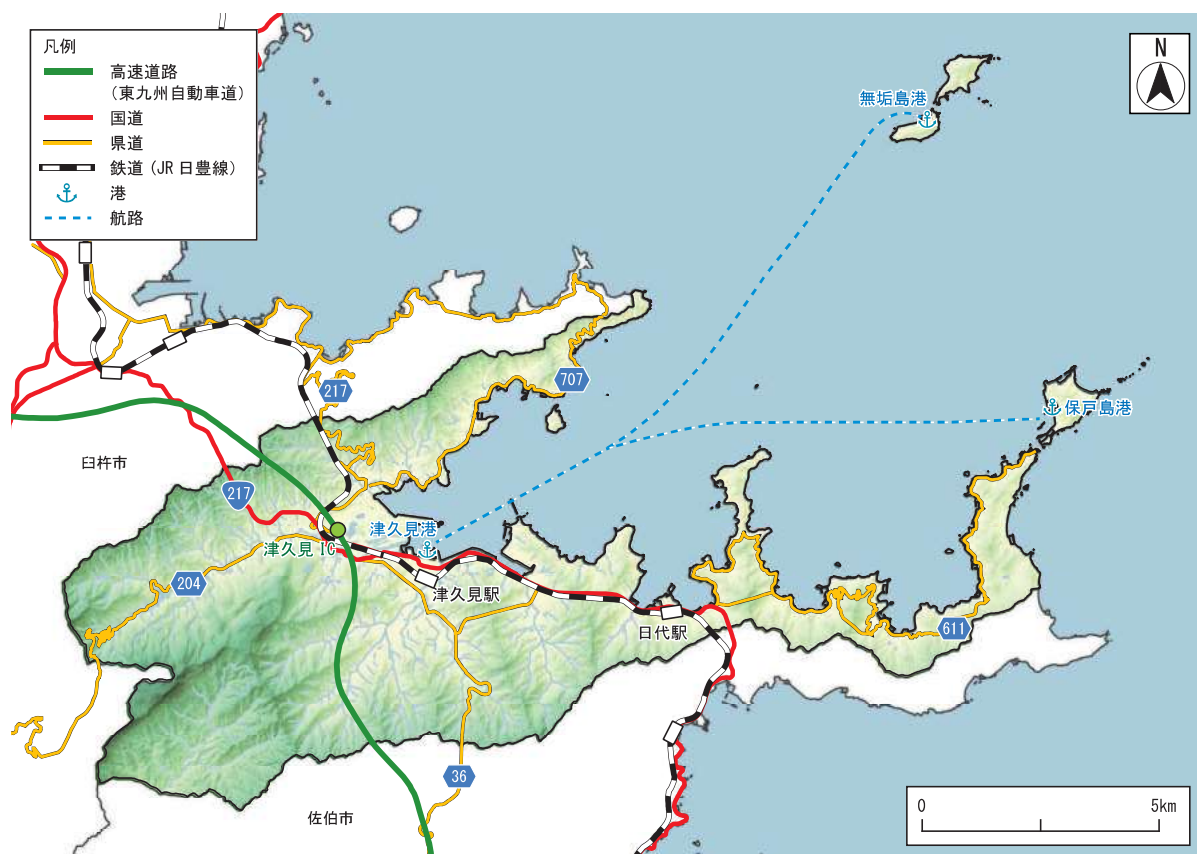


図 18 公共交通路線網図

出典：『津久見市地域公共交通計画』を参考に作成

### (6) 文化財関連施設

本市の歴史文化にふれることのできる施設は、津久見市民図書館のみで、今後の展示公開施設の確保が必要である。